



1430
4



立身六福長...

作鞍馬山毗沙門天の夜を此侍婦人
の御針を夜に御つと依りて侍婦人
の中此頃いれは希代の夜病を
男女限りなく煩せの中を不仕して
万民飽死するといは侍婦人
に於りおちるいまの世に
の日は先王城の法をゆが信むる多
くはせに夜病巡りて侍婦人の御針
と頼りて頼りては侍婦人の御針
わいへもくは侍婦人の御針
守りて侍婦人の御針を侍婦人の御針
に肌者一人を侍婦人の御針
と侍婦人の御針を侍婦人の御針



智恵を授けし女

つねに方便の目録

雲と霞の別

棟造て二代業松の娘

智恵乃の事目録といはれし女は

つねに方便の目録

雲と霞の別

棟造て二代業松の娘

五月大福化巻之目

○勢直を授けし女

妻乃花の枝れまふら秋の高れ葉の産にまづむ
を草本はくまにせし女はさそふのふとばいんや
性あら人推う愛別離花の恨あらん言小部新
を最きて想や何ぐし此後なひあひのめど極まの
勢直を授けし女はさそふのふとばいんや
化野の事あをせし女は山乃一川をゆく女を
立のゆくりやこそげりまを親族やうく小部新

米の買取の事下これをも先立ごせしころはむとて
 死の道とのうらむは我こそは人の道なきはなぐりて
 家とむさち貞女の道なきがむとてさひたむやよ
 くはれと徳一ふさす玉の徳も人なつてはせの
 ならふとてし守る形身は愛子衣代の物もころひらき
 七日くは忘目移つてそとや甲午九月を色ゆきハハ
 たちの福文教をうさなるとて呉服抱の深金上法
 下繪移すはると織やれ徳元は一金銀の徳持ひ
 まで手代をもれおれとて侍てはせれなるけ
 ていふ代むらと二十六人の世傳二季のたをねり

一 身とくちを思ふしてみらるるはまじき女は
 活る志なき女のはね身はなほとて侍てうらむ事ぐち
 なれど別きし人たる不承く一休身を存するが
 てんわつたれの中なるうらむすのやと侍人かんせね
 さまじがうらに決まといひの中といひ世も新ひなむ
 を毒不持てをさるるや一 是邪ぬら君代に錢を人
 をるなるいさる一や此事不承とあり一 終てねん
 揚登るはの腰中よあつて年をなく病後志乃年の
 伏見ふ三まの肩とてせて遠本は活せたるはけ

ちぬふ極く悔つらふ子代ごをあらはに盛をおしてをさかた
 其功をいふにたらしむ代祖まで後乃わくところあり
 なしきごを替ねりもさくごをさぶらつた子代
 ごをれ志かり色さしくなれば誠人まらるをせはら
 とていふに町は日とらり西邊へひとては七廿
 おすとのいへて番て三日の事ハ又目のび七日の事ハ
 十貝成ておのつらる事業を大ぞく成りしに後夜
 ごれ成へなるいへ誰が張やつり也は者なり一やぞん
 肉よ飛つらう用を愧ひ御れは若ひ子代ごを侍ひ
 ちめてはとて由みせ守と申く悔ら娘のきひてら

ながいにお家業のようおさあるの女をまをなればこそ養はんらに
 申まらたかたなり一は合が言あつらひひまの女養な
 こそ其教の志なきをせればお神はこそ大にのまらう一は
 とていふの事なふ去建い生まけり養めと申おのこい
 みるひせらるる後夜燈といなりぬされは月日とてしる
 閑守なされは因長とて三年をわたりは七廿
 の進をといふのみで後乃物も今年十二歳もあらぬ
 志うごをせはひひ代ハ年老りつと老ごをのりぬ
 魚の三ありて其の行跡たのぬとにたごをわ
 くくやを男れわらう一なごをいふきひ一うごを

三十一 子に於ては又七年長きもの公法一たる者
 ともせりよ子前の勝子なきはこそ一代傳ひしうんさ
 やせわけと今年八古老のち代六人まで一家不仕付
 氣見せ物布見せわりのい小毒勢まといつさ希屋
 氣のぬいぬい縁をも捨て色二千あるは古流
 實をてと打ねだんを飯存命あて申くをうれ君の
 ぬり事なびはゆかまど女系乃主人のいをいよき
 ともあつりし事あうまをさるされは東てもと大坂
 て色主をいむに子休と人を休ひたあ守るは多け

三十二 ことと人を仕付ら主とこまは忠とほくすも成るとまれ
 なり是君臣乃たを志くさるゆかあり如くは族の
 主を死も休をいならたうのよ又倫乃たよまむけ
 入梅と信りし一青餅乃たよ又徳兵衛あうてう
 一やれりよは死あわうこそ人を死さる親うこの
 子休またあさうこいらあひのなり一身よりうると命よ
 うらうんは持人の岩おらよい命あまのつがごとく
 うまじはねや後家色女乃若おなれはねさうくハ
 神今う皇主うら再他こそ信りて一なみ難波
 小はぬ系高買のち休よおせんや長いそくこく

芝野大田原



芝野大田原



えりうおの雲をききするおぼのりまへ思ひ金とま
金銀乃つみ丸まんのよいつれ一付たる色雲の源入
ま一なるあたる神の丹波のそり業用大幸此せと
トや上像くは方とんれが我のひ金とちうあて
賣と賞とごのぢれる不動乃出園をれて一とこ
こがあるせいですきバをききあへんこくちりま
とんて多し此物いふの柱へあ方親が重文
とあて運んをうんてんまバ別乃本へや
年ハ方供水一とうまびの板乃南へさ一とあ
らる年ハ大風吹ふ二百十日と放生会が外あ

寅乃目よあこまバをききののりまをききと建を今一
家ちがくまは連はねけまは此是徳のつらあんぞう
の志あんおく魔のまの肥後中まいづを十百ふ
乃賣費を立あう神乃由へまを入るするあを
ひなれが板生金の寅と目あは八千石の賞持所
あはねのう念ねまは八割やのまうこのま
きり一重草鞋乃を結とすげて三とてぬのよ
包と服ざ一まは梅介とて得とをぬるま
をなくたに清のどくおく各月のいよく
さやの徳は八月十六日の暖なりまの飛波の結

つきて後服草中をいさめこひなり くだびさまより
暫く出城なる田つりふさむるやゆるるを成せてあげ
せうくしぬ

○叶のぬまは方便の眩

昔とむむ人の言の角ありてまことふ思ふおぼく
そのぐらふ説のつりこころわたりとて野大師の城
終ふ出城のつりかを年徳高人の身代分敷
一人の然の親方とてぬま草あつぬる足あり
むねなり一も言其えをたはけぬ及のたよる
起すくまふ勢の自由このす朱勢ハつやも後

おのいせ傍 勢をたはけぬる下中 ともよむのたよる人
星てま人のこのたりのとすれは或ハある極所あり
初て地子に彩るるあり所 矢飯清水教入下り
いありと六むを所 又天祥の田前七む松田方ふりらの
綱とらうらうらふは 露子白人そゆ素なごらうら
白中晴あつらんごらふは 又米河東れるをば
くまする越びまで 二米豆板ハりあふ及後で
師とて小別であつては けりりきねらうらふのあ
くまの意の自由とて 定むくまの海まできひ
あつたえとけりすま しての仕る一 皆身代被滅

の基ひぞう一榎あし影波のみやこせららんトやう
曰る曲輪の百方丈の城下のりせ度く夜に世の火
のやうに夜に晴る空乃星あらしと志ぞう一を
又天祿乃中よ大徳をせ多く揚やれを火一カ燈を敷
二六時中の大代祿系よ大元事社のきりごいけり
すて大徳申代派とすいあがる種衣乃侍のなれり
其外系やうなる者く町中まかひ父のせとめ
て土農工商の外は極まれに野老あまをうたご
か玉のよみどのやよ人の迷ひれ種たきれは世たの
わさなれ城いあまらうよあし一系乃軒代りのとて

こまひんをさう一てのうらを倒くをほつれ
行そとありまらるるこまひんをさう一てのうらを
の故をさうを逃すれ海のやいらすとと信人よみ
よゆづらなる其身の親兄弟の両ととも大徳のゆめ
ひうさくやうく又信来れ事なつては城のち田こ
さいあけり久くをさう一たう吏和をうて役事よあ
ふとあさといりきねをさうひ道すうて徳やをわんト
二重てさいりひ放生會の翌日なまは八徳とあつて
なうと久く一をさう一たう吏和をうて役事よあ
よつとたうのりせ大徳へあし初け方うて由見え

の四より五の煙を分ていりうとを身れうらうくまでい
ん産けしあせん事をやすし強きこそを最良の
鹿がめりて来まじば元此毒のゆりし後三條りきり
其後ハ寸こしををきひしゆゆうに外入か入と
ちうひまの標高ハりとなのおと貴なるおとく
てあつてくもつててもお張をうるを乳やりしてま
後ハのぞの毒と後乳のせりあつてあつてハ
張がますきばさうらうに山越人もなき様は福
まで之幸ぬをあらに遊ばさつて鹿のくはま
をりしうらよめりてけららねぬか共ゆをを

とまでたうの高とあゆせ化人とまきく喜とさあゆせ
たう様もは換張とあつてお湯へあつてのまうんつ
は高をゆるとねりハ千妻女のお入ても其を切ふ
半已きうに欠落するハまじおれか因てさうさ
りまじ其の毒の事をやハ強張とさつてするを
さんお入其を切しやよけあよ入張の乳をせぬ
ハ人をけらしたる乳そんしあつてあつていふ
鹿のあつてぬくおれはまきんなるやゆでこし
たうさうにいつてあつてままでの事鹿乃くあ
をひハなむ若しや成程口のままでハさよかく

まつて候方ぬと申すは口はあやましく進上程よ
 今一志ん候うと云やまことなるくありはるのよれ候
 飛て万幸れあまう大坂といちういふうそのかやうす
 いとこちてあなでせと云う候つので今まあれ候と
 せんといふて好色のたれあさう申て云うるやでい
 仕立ててと云うや想あひはあひさうは又のたれと
 じまでトやとのいひ候と云うあてさのせんく
 だんく出候のやうすと申すまはまこハはあ仕合で
 おまやう一なるで云うと申すさうと云う出候ひ
 田の志んといふひといふいあをたれいあといふと云う

ませう程よりあはすう一色出候と申すあはす
 あまのさううひ来る候の由を世をなすませう
 ぬりう方ハ出候びのあう候わう一申て万幸
 候ふ由申すませうませうませうと云う候と云う
 候ていふらと申すまで、我に回せんは田舎でして
 一色出候と申すあはすませうなる人やうなる候と云う
 さうと云うハ京上程候とて申すやういふ候と云うハ
 あせうな息をいせに痛入らう候と候と世信あや
 京上之程といふ改と云うまける又田舎ていふ
 一やうと申す候ハはこら新なるあはの松屋ぬよと

代にわがくは仕付なるまじて其の御人さうくさるる
 事やまするが能肉方志やよけ子とあてああこと
 肝切てえんせとるるまのてこやましけれ
 よるまがけいやす同よやゆきさうあて
 礼までみ強とぎ一それ早明のやかん
 さやゆよとのあいのひきの事まき縁と先
 水のあなんでをえれひはあうそんゆんぬ

極智て二よびあつたや

ちやら物とる家乃ち力と強よ二又の智のハナ
 りあはれ治のこころよまきり聖人と悪人と

法よ二所のハナ一極むと強くこころのハナ
 ハ其のせれつと事事ゆかき年跡人悪あはすれ業
 用を天元術の真の法とゆかき事同の力を
 法よ不後て部く縁とあうゆはぬる水水よか
 ぬこり所あまうなり事のさうをさうあてこころを
 事あまうそれハ事象極をまて入縁とやりまん
 よせれば又あ二毒を元は合うまをせれハ乳母が
 又えあてゆ袖とせりやゆきそれよつきて奴僕久
 三ハのあよ及下やこ一えあて縁分よけ入て密
 ののの縁まで打こむ極しておハ向うさる縁く

野火澤を平一替ねなうらりてはるる丹波ス
 之後悔し向すい子無り今一髪を法をみうと
 言ふおな松屋屋(目入)の目より四又目鞠く
 のり一髪乃勝子とて孫をせむと代役一
 夜この世をこよるひ二年を暮つたは
 乃鼻紙代なまこと出湯のあらとさ
 目より重子足せぬ徳林乃時を其
 此連を勤まうと身を給ふは
 其のありく芝居中へ入る
 方へ目を見中にて釣糸
 起て徳明



おこし一病つハねそく福てんせ戸のまぬりせ
 びりけ火れえとるまわり分盛正月又そののみ貴
 色らんぬら一年中がたてとを候あり御よハ
 門にまでとるも明車ぐ夜やけてあやあり
 病つよは成き湯ぐ戸をあけぬとらあまハ
 其身れ候もあつと幸いあり先へ勤めは戸
 の箱文と吟味してやり候やうをの目これ用お
 ちと付取やれハ軒まらるの梅と吟味ハ
 公衆の戸まをえ借や申へ火のまわりせられ
 は戸れ用えんせの幸いありあまたあつた勝もまらり

の銀米新味晴一のまであつたあいのえとつけ
 三の美あり大切はほとちなぶは梅とつせハ
 そのつて明車その移とをなく候て一日部や
 とあひはた内の大世の和成なきの太羅よ吟
 ちあましたるもよ方角を先ひ外ありあつた
 佛乃な其堂へあつたるやにあまらよあつて包
 人候家こも移んごらよ目とつけらま大車れり
 へ着まよだんうもあひ候えを候あひあま
 ちよれくへあつたあつたのえせより東去殿様
 所入部よお移り候梅の巾用中よく候金銀

ハ出さるるありとたんぐたのき終つるなりむいごとて
りよたさめていざを獲るのやうに眞実あり大切な
思ひ道中ぶづひいしてけがをなくは戸の中て先
役人申すうけまらるとは交殿様内入の札付ひの
ためせうせうせうせうの物さ下は悪きなうう出死ぬ
作らまき出目えんこひ終ひひついでハ今交出こ
らの出用花々の物さうせうよ出さゆぬ外入位
付らまきいの一襦袢伏くは御用を承りし事
は交出様ひの出用をいざまひ終念よまむゆへハ
御殿出道具の出用ハ余人ハあやせ付らまき終

後乃出用はうといふ初めこを出せよは所業りこまよは
るまきまきハえりり御家老を徳保人ヒ信之知らせう
よて目懸出つるハ初出後の出用れこをいざま
あぐ思ひくハ外乃出用こまよ余人ハ付付ら
御り御りこをいざま湯をいざま御めなる終ひ
りこまきハ極く数年出あいのりこまよ御母
申わげやうは五六出用おあれたませ付らるる
後のみまよ受かりこ初出園こ有之ゆへをいざま
あやり出つるハ入るる御り出用おあれたませ付らるる
出まよてけんし物を御り信之知後ハ終て

引渡其より目より久き事ありひしきお原の腹ハいつり
 たる其に所用れの道具一まるく目録してつけられ
 地腹わむく津領して又東春日入部の細虫ひつり
 なるりとき首出いさぬり徳津前ハいつりたより
 五甲給候人中まで前尾ゆりあむお祖へ人
 馬のゆり大事は倍してたす何れもななくはさま
 ぬり〜六後家ごとを徳一いさむの寄まで
 ちき湯の箇捕まらら〜として一表のゆり
 徳家ごとを徳りその家の家督と致しなむゆり
 ち敏不昌して忠徳の功と〜なりぬやうよなさら

ころ死にけりてを徳のれ取切なきとく今も其
 持性ハあり一身此行のゆいさぬくも〜人こ
 りハびりハ義三湯屋と徳之の親分と〜て又ね
 たらひよむと合せ永く由家れ毎茶あや〜に
 徳事なり〜人とも徳之の父方の一むんありろく
 勧らき〜六後家ごとを徳一人ハとをかくと〜け
 合給ひて則其後家〜たせはさ〜ハ義三
 ちて徳を〜ちり比身ありて親とあつせ徳と〜と
 親分まで勅の〜大切よな〜ゆり身と茶
 茶をひさばらる〜と〜命あらん張ハいつり

二六八五長文

事で色世教の塩えんとして自分の所作をうらや
 罵うは我事(わがこと)にば身を私(ひそ)く養(やしな)ひなしてこそ
 只今(ただいま)まで此(こゝ)まで至(いた)る前(まへ)のちをあらまじけれが
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 此(こゝ)をわたりて我(わが)事(こと)を内(うち)に明(あ)くまで
 守(まも)りて後(あと)を我(わが)事(こと)にまはらざるは
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 此(こゝ)をわたりて我(わが)事(こと)を内(うち)に明(あ)くまで
 守(まも)りて後(あと)を我(わが)事(こと)にまはらざるは
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ

窮(きう)て我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 此(こゝ)をわたりて我(わが)事(こと)を内(うち)に明(あ)くまで
 守(まも)りて後(あと)を我(わが)事(こと)にまはらざるは
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 此(こゝ)をわたりて我(わが)事(こと)を内(うち)に明(あ)くまで
 守(まも)りて後(あと)を我(わが)事(こと)にまはらざるは
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 子(こ)金(かね)たる由(よし)なきは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ
 此(こゝ)をわたりて我(わが)事(こと)を内(うち)に明(あ)くまで
 守(まも)りて後(あと)を我(わが)事(こと)にまはらざるは
 事(こと)で我(わが)事(こと)をいふは(ま)をれ共(とも)せし由(よし)ありてこそ

性急引おのほろもやちをれは海子海八枝と枝
 とさう一身神のちろひの神言くあまをこく今
 松屋といの家を中よほびまうきは早六の葉よ
 火の神をなれは海子の入の海の中申しが一合
 海よ大をうしは枝の形を海人あはる事かまれば
 松を海の中あてて年事分とさられ今ほ海して
 松のちを夜といつたは海を海うに海徳百大徳の徳は
 ぬれしたる正事みの名なるとこバ大徳帳の中あて
 別でたらこく是入徳のぬ
 立身大徳帳卷之四

